

審査の結果の要旨

氏名：白 承冠

本論文は、サン・シモンやシャルル・フーリエなどの「空想的」社会主義者の流れにあり、企業家でもあったゴダンに焦点をあて、19世紀に彼が実験したファミリステールについて建築・都市史的立場から詳細に論じたものである。従来からゴダンのファミリステールはフーリエのファランステールとの形態的類似からその実現形として捉えられたり、あるいはその差異について言及されてきたが、ファミリステールそのものを総合的に位置づけた専論はなく、本論がその最初の試みである。

本論はファミリステールを分析するにあたって、(1)「理想的コミュニティを目指すゴダンのファミリステール」、(2)「ファミリステールのオリジナリティとその建築・都市史的特性」、(3)「19世紀から現代に至るまでの歴史的建造物としての修復・再生」、という3つの軸を設定し、それらの有機的な関係のうえに立って、あらたなファミリステール論を提起している。

(1) 理想的コミュニティを目指すゴダンの建築的実験のオリジナリティ

ゴダンの社会思想においては、フーリエの概念を踏まえつつも、19世紀的観点から来たるべき新たな社会を目指しており、著者によると以下のような革新的な思想が表出しているという。すなわち、1. 道徳と労働の強調、2. 協同組合や協会を強調、3. 社会的相互扶助の強調、4. 暴力を拒否し、平和主義を擁護、5. 新しい社会においては一人ひとりの知的かつ道徳的解放のために教育と住宅、広い意味での建築の役割が重要であると見なす。とくに教育よりも重要なのが住宅で、個人や社会が必要とする生活環境を十分に備えた新しい建築の適用を強調。とりわけ最後の5の項目が従来看過されてきた重要な性格だという。

すなわち、著者の分析によると、ゴダンは彼の社会思想のなかで、ブルジョアジーの個人住宅に設置される衛生設備と家政婦、保母、料理人等の雇用を通じて、各種サービスを受けることを「富に相応すること(équivalents de la richesse)」と称して、こうした設備とサービスを受けることができない労働者たちのために総合的な住居団地を提示したのである。そして、この住居団地には多様な階層が一緒に暮らしながら、社会性を向上させ、人間としての階層を越えた友愛を拡大していくとともに、女性が家事労働と子育てから解放され、経済的かつ政治的活動に参加することができるように各種家庭生活サービスが提供されるなど、住居環境におけるゴダンの考え方は、社会の発展に繋がるものであったことが次々と発見させる。そして、こうしたゴダンの考え方が現実世界に適用されたのが、ファミリステールであった、という。以上のようなファミリステール像は、著者が本研究を通じてはじめて位置づけた、きわめて興味深い学術的意義であると評価できる。

次にゴダンとフーリエの関連性を探るために、第一に、ゴダンが自身の思想を表明する

ため出版した著書『社会的解決(Solutions sociales) 1871』の解釈をもとに、テキサスでフーリエの理想共同体「ファランステール」を実現しようとしたフーリエ主義者たちに対するゴダンの考え方を考察している。第二に、ファミリステールの建設にあたって、代表的なフーリエ主義者であり、建築家であったヴィクトール・カルラン(Victor Calland)との協同作業が失敗に終わった理由にも言及し、それを裏付ける史料として「ゴダンとカルランが交わした手紙」の分析を行っている。第三に、ファミリステール協会(Le Syndicat Mixte du Familistère Godin)の総責任者パニ(Frédéric k. Panni)氏とのインタビューから得られた内容をもとに、第一と第二の分析結果を再び再検討している。

(2) 理論から実行へ：ファミリステールの建設とその建築・都市空間の特性

労働者たちが人間としての尊厳と自由を回復し、豊かな生活が実現できるためのコミュニティが建設されたものの、当時の空想的社会主義者たちによる理論上の運営方式は実際に適用されずに計画に留まったといえる。その主な原因としては、資本の不足と運営上の問題でコミュニティが解散することになったことが指摘される[第一章]。

こうした当時の労働者向けのコミュニティ建設の試みが長く続けられなかった状況のなかでゴダンは、1858年の土地の取得、1859年からの三つの建物、いわゆる社会宮殿の建設へとつなげていく。1860年には119世帯の住宅をそろえた左側棟が完成し、1865年には350世帯の住宅をそろえた中央棟が、1879年には89世帯の住宅をそろえた右側棟が完成した。この三つの建物、すなわち社会宮殿の収容人数は約1800-2000人で、1880年には1770人が居住していた。つぎに1883年には工場の労働者たちが増え、別の住居棟が追加された。

そして住居棟の社会宮殿の建設にあたっては、各種生活サービス施設をそろえた多様な付属建物が相次いで追加された。1862年には中央棟の後ろからつながる幼稚園と託児所が、1865年にはベーカリー、食料品店、カフェなどの付属施設が建てられた。つぎに1869年には学校と劇場が、1870年には洗濯場、浴場、プールなどの公共サービス施設が次々に建設された。こうした多様な施設の建設にあたっては、環境問題に対しても積極的に取り組んでいた。このように、ファミリステールは工場(1846)を中心とする生産の領域だけではなく、社会宮殿と名付けた家族のための共同住宅の建設(1859-77)から広場(1858)、商店(1859)、託児所・幼稚園(1866)、学校・劇場(1869)、洗濯場・浴場・プール(1870)、キャンブレ住居棟(1884)の建設に至るまで漸進的に建設されたことを確認している。

この部分は本論のもっとも具体的な箇所であって、ファミリステールの建築史的位置づけに対する著者の見解が明らかにされているところである。すなわち、ゴダンのファミリステールにおいては、機能と拡張を考慮した住居単位(ユニット)、近代的な設備、機能的なゾーニング、コミュニティ形成を促す装置など、近代住宅、近代都市へ向かう実質的な計画とみなしうる。

また、19世紀から20世紀にかけての建築・都市史的観点からみたゴダンとル・コルビュ

ジェとの関係についてみると、一方は 19 世紀の社会改良家でありながら企業家の立場で、もう一方は 20 世紀の建築・都市計画家であったにもかかわらず、住居問題という共通したカテゴリーの中で接点が見出されている。とくに 20 世紀にル・コルビュジェが論じた空気、採光、換気などの衛生と関連した住居空間の概念は、1870 年にゴダンが『社会的解決』のなかで記した新鮮な空気、豊富な採光、流れる水を利用した建築設備などと類似していることが確認された。すなわち、ゴダンとル・コルビュジェの共通性からは、ファミリステールが時代に先駆けた近代性と現実性を示唆しつつ、かつ独創的なコミュニティ実験であったという事実が明らかとなった。

(3) ファミリステールの過去と現在、そして未来へ；ファミリステールの修復と再生

現在の協会が行っているファミリステールの総合的な計画『ユートピア 2000-2015』は、19 世紀にゴダンが実現した生活共同体をそのまま復元するに留まらず、現代における新たな必要性を十分加味し、住民はもちろん地域コミュニティを活性化することとともに、社会的、経済的、歴史的、都市・建築史的次元に至る幅広い分野で新しい価値創出に向かっていることが確認された。また、その具体的な事業の一環として、現段階においては住居建物の公共所有への作業が行われており、ヨーロッパ連合、政府、地方自治体などに至るまでの幅広い支援を受けながら活発に進行していることも著者の分析によって確認された。

(4) 19 世紀から 21 世紀に至るゴダンのファミリステールを通じてみた「ユートピア」本来の有り様

19 世紀のユートピア思想と触れ合ったサン・シモン、オーエン、フーリエのように、空想的社会主義者であったにもかかわらず、ユートピア的発想からかなり現実的に考えたゴダンは、以前、あるいは同時代のユートピア思想や理論に留まらず、実際に存在するユートピア共同体「ファミリステール」を実現した。「ユートピア」というどこにもない場所、いわゆる現実には決して存在しない理想的な社会が、現実社会に存在することになったのである。これは、当時の資本主義生産システムがもたらした労働者と貧民の劣悪な住居環境や衛生問題など、社会問題に対する解決策として実験的に具現化されたものであると結論づけている。

(5) 社会を変える憧れの建築「ファミリステール」

現代においては個人の自由という考え方が強いが、そのことが社会への無関心ということとは直接結びつかないだろう。にもかかわらず現実には、他人への無関心さは増すばかりで、今日の都市とりわけ大都市は建物、住居、人間の単なる物理的集合になりつつあると言ってもよい。このようにますます物質的に豊かになりつつある現代社会においては、物質的豊かさの前に、人々の問題意識は薄れてしまうのであろうか。いずれにせよ助け合いや、社会的連帯あるいは公共性が時代の経過とともに、ますます退歩しつつあるように見受けられることを述べ、ファミリステールの現代的に意義にまで踏み込んでいる。

以上を要するに、本論は従来部分的に触れられてきたに過ぎなかったゴダンのファミリステールについて、はじめてその全貌を明らかにすることを試み、史料を博搜して著者な

りのファミリステール像を構築することに成功した。近代都市計画史の厩大な蓄積のうえにあらたな知見を加えたものとしてその学術的価値は高い。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上